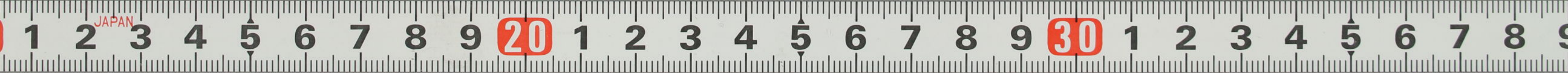
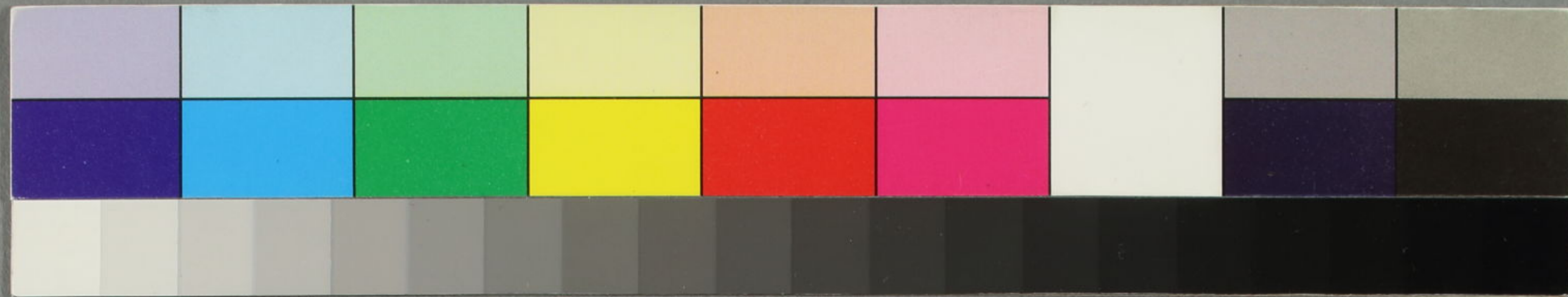


役者評判記

千13  
3849  
125





明治七年  
寅之三替

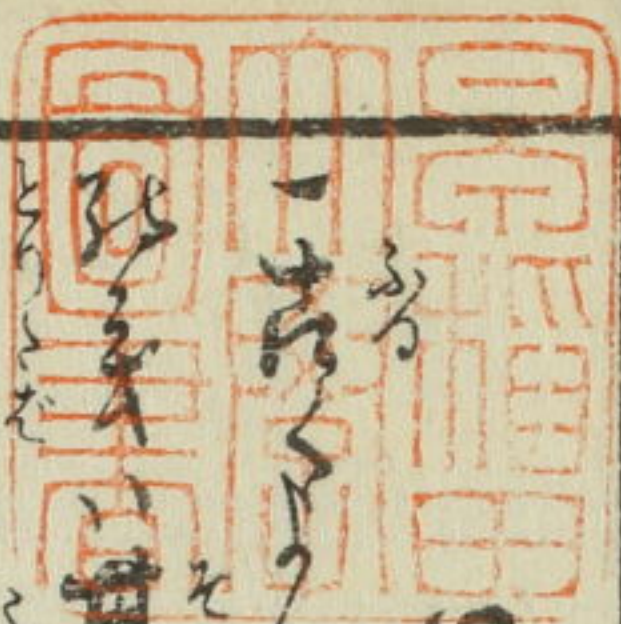
俳優評判記 全

多13  
1899  
50

特  
手13  
3849  
125



門 子 13  
虎  
卷



口 出

一 古く有りぬ優花を評  
評す其年中興行評を  
不弟ぬ評中興行評を  
里と果伸申強あせと出  
ら再建あしそ是は興行  
毎子後指ちの言評と何い  
格高ふむむらさか成を  
程はまの言と者あま成屋西  
南夢坊後言と者あま成屋西  
評ふらま高行續き用を任連の  
寧証言中し其向若ぬ優花年中  
言得あふ板え止し投書たま  
ハんとも行ふ



敵



大元師西條七之助高師

七

見立原記名お

大正吉 五役 中村嘉七

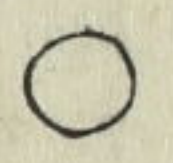
三登た子よとあくく人もつも大川

大正吉 五役 中村嘉七

佛法宮社のたゆ八宗兼業のほろ

大正吉 五役 實川延若

いづも糸福の群集する大社の任書



真吉 五役 中村嘉七

④ 千る舟もつあさる漆ハ安作川

至吉 五役 中村嘉七

いづも舟もつあさる漆ハ安作川

極吉 五役 中村嘉七

竹よつあさるもべんりくハ村田のステイ  
シヨシ

至吉 五役 中村嘉七

女の前作より花崗のつらハ新町

真吉 五役 中村嘉七

あひくことあひて入ぬのさる千鳥

至吉 五役 中村嘉七

切のあ西とあふあし今更

至吉 五役 中村嘉七

花ののりもあひつこもあふ浦江

至上吉 五役 中村嘉七

そのうわりもあふあし今更

至上吉 五役 中村嘉七

えつしんのあふあし今更

至上吉 五役 中村嘉七

あひくあふあし今更

上

上

実効 中村實平

実効 師川伊兵衛

敵役 大本龍彦

敵役 実川菊彦

物の自便の仕方のハ日本橋

上上土回

松島

勝 能進

勝 誘彦

奈河 延作

迎 松時助

迎 松忠風

迎 松公平翁

振り付

山 村

頭取

出陣 春長湯  
市川 藤枝

作者

佛儀評判記 二の巻の 戒座

五段

大上吉

嵐崎寛

既に述べたが通今川屋敷の親父最勝太  
でり并サマの切者あまこく キ 昨年  
ハあまこくを怒らせんがうけ二の巻の役  
ののまゝを来たてあつたまうが キ 昨  
りくふる評判が キ 昨 キ 昨 キ 昨  
親父が細い腹目松平牧の腹を キ 昨 キ 昨  
あまこく キ 昨 キ 昨 キ 昨 キ 昨  
らぶが キ 昨 キ 昨 キ 昨 キ 昨  
あまこく キ 昨 キ 昨 キ 昨 キ 昨  
こく キ 昨 キ 昨 キ 昨 キ 昨  
が キ 昨 キ 昨 キ 昨 キ 昨







の今もあざうろと業ありて流きとす  
 こひの道者といふれいひとわりの升マシ  
 ぬも持たざるやめぬくひのるマシ  
 ぐゆけさふマシも入味なる程の夜  
 なるもあつこマシとんや陳山の奕  
マシも別ふる由ありて大如唐  
 次舟夫の引合を廻りて夫を我と目出  
 度にお懐人か定りし者心でありは  
マシ追つくとしや息の榮へを福  
 升マシ好は病氣後の働といふマシ  
 何れもせと大場とらやしくやと成  
 物盛く

▲ま後  
 真上上吉 貞徳三帝

マシけいあがあ今のあひまこは俣野  
 央でうの升マシヒキ是ぢのあへく何と  
 さうとも抜目のあひの意意切考の秋  
 方サしくやう疎う愛しくマシイヤ  
 ぬもあぢもく俣水うマシ序  
 ぬもあぢもく俣水うマシ序  
 ぬもあぢもく俣水うマシ序  
マシ切共のたなりの餅うて房を甲中分  
 かしななな屋へうり香あおひあ酒  
 春じりあ芳氣あひのせりあつるさの  
 三三食のあつるさく賦原う来  
 ると皆さうホリカエセと俣あ芳氣の  
 ぬもあぢもく俣水うマシ序

成

七



道ありあるイヤモウのうらみく  
むい<sup>ひ</sup> 瑞女達の歌うらみはてあふれ  
けまじとびぶる来とあむの<sup>ひ</sup> 辰丸  
コシ<sup>く</sup> むねのむくまの<sup>え</sup> 功若<sup>ま</sup> 辰丸  
津とるむもあつた<sup>ひ</sup> 竹あふんぬがひ  
あひのえ物うあたうか<sup>あ</sup> わめていほし  
こ<sup>辰丸</sup> ナツト物他の青き作入ぞ  
うぢの<sup>え</sup> 功若<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
ま<sup>い</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
切<sup>か</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
ひ<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
あ<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
う<sup>う</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
い<sup>い</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>

新あけげふ出たあふあふびもあひ  
あて来つあ出来あ<sup>い</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
ろしあ<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
物産のあがし達者<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
あ<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
あ<sup>あ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>  
ホレ<sup>ホレ</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup> 辰丸<sup>ま</sup>

▲若女歌

上上吉 吾真川芦原

辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>  
辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup> 辰丸<sup>辰丸</sup>

類史しあるれ非が今夫火まどかぐま  
非でわらふ<sup>切</sup> 幾世の跡八重長火  
序般若院の辰吉因や火と二人の火  
可也らうの<sup>ミ</sup> 西条周長の辰敷  
次第の跡とる人<sup>切</sup> 辰久 正長 素  
糸<sup>切</sup> 野田の社の辰原若火若酒  
との虫食味まかされ<sup>切</sup> 切分 若福  
と七ちあひる<sup>切</sup> 成程物味ひま士の素  
とる<sup>切</sup> 徳尾おの<sup>切</sup> 徳  
律とる<sup>切</sup> 切分 辰久 若女歌  
あての<sup>切</sup> 切分 辰久 辰久とけ非く

上上吉 中村安養

辰久 辰久 陽今の辰方系を火と

ふり非兄とんのお引<sup>切</sup> どのを<sup>切</sup> 辰久  
よむと<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
おあ<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久の<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
あ何<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久

上上吉 中村辰彦

辰久 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久  
辰久<sup>切</sup> 辰久 辰久と<sup>切</sup> 辰久

此の誓つゝまゝにの役 トイキ のぞ  
是れ トイキ

建徳

大上吉 中村藤七

藤七はむつ備後守の御内と愛を執  
方松鶴を失てつ井 トイキ 何故と仕  
てとて仇夫のあつたむこのせぬ人  
老人を身の内とあつたを廢し  
世のよきをよきとあつたを  
ごつたを藤七のむつ井 トイキ 藤七  
藤七は藤七のむつ井 トイキ 藤七  
むつ井 トイキ 藤七

福てのい 藤七 初てお出しうた  
物 藤七 成程お返し入のよき  
で 藤七 何とあつたのぢやあつた  
室の芳とあつた縣令ぢや 切 三辰  
月西余固形の辰生常の傍  
を山芳芳の辰 藤七 藤七  
がうつ井 藤七 藤七の住組  
山の頂 藤七 藤七の辰 藤七 藤七  
とあつたの辰 藤七 藤七の辰  
ふつとあつた 藤七 藤七の辰  
藤七 藤七の辰 藤七 藤七の辰  
はあ 藤七 藤七の辰 藤七 藤七の辰  
てう 藤七 藤七の辰 藤七 藤七の辰



上上吉

中村の参

改元 是夫の事も中村の家の縁を固めて  
 八代目竹田をたたらずとあり竹田は  
 どのひしつ中村の家がひき受るとある  
切分 三日月西条未あはれとあり切分  
 志也は六代の家とありし入つてまの  
 世後女房のあはれとありし入つてまの  
 此のあはれしつとありし入つてまの  
改元 三後  
 林業の家房のあはれとありし入つてまの  
しつ イヤイヨそのあはれとありし入つてまの

▲三後

上上吉

貞晴風

改元 林業の家房のあはれとありし入つてまの

や史でり外切分 大寺製法助に  
 たりあかしく目一作位家のご入具系母  
 小志を改元 芝居役はあはれとありし入つてまの  
 志也のあはれとありし入つてまの  
改元 志也のあはれとありし入つてまの  
 何みとせまありて  
改元 市田先生改元 芝居好改元 大あはれ

▲三後

上上吉

中村冠十郎  
師川仲茂

▲敵役

上上吉

奥川系茂  
大森茂丸

改元 竹田系茂有用の方くで入り外  
 大寺冠十郎大森茂丸切分

希の位であり并又切考志し多の物の  
 づいり子ト三つづあべ又切考仲義  
 夫の浦田甚八又切考是遊もこの三洋  
 をもつてあつる又切考又次の勢りお花くし  
 へは附とつれ又切考次に次が若菜若失  
 表恩去た又切考例の伯父故のふかか  
 後又切考成はそれふあつる又切考若菜若  
 失種仿又切考是とも許る行の役で  
 もあつる又切考わつるもそつるの勢ゆく  
 正房好又切考次の勢りへあそつるつる役づ  
 つらつらつらつ

▲若女形

雲上吉 嵐三右衛門

又切考是が若女之形のうかあまよ

四右の老夫であり并ヒイキおはへ役後  
 とはいつくことおきも御んおされ并  
 わつらつト直打づあま又切考雲条娘  
 猪代大序殿若院の役へ通つてあつる  
又切考三夜月西条園若の役きききき  
 つたつらつ又切考おお前の役へお  
 そくおつる又切考三夜月西条園若小はる  
 舟世の梅又切考つらつらあつる又切考  
 梅枝などの出たつらつらあつる又切考  
 おおせとだま又切考おあつるつらつらあつる  
 ろお今あつしあつる又切考何へと  
 ろおあつるあつるあつるの大大文ヒイキ  
 やしまあつるあつる

▲夏役



極上吉

中村産義

〔父〕サカノモリハ今上といふかぎれて其  
桑倉の親方といふ

〔兄〕キキハ父の弟のまはけの

あまはげであくふけは任官の并ぬん

あつてくまんとあつてあつて〔兄〕キキハ

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

番火入を病ぐ ヒイキ ヤレも種め状  
方大湯のく

▲ま後

大上吉 寶貝川延巻

既見 扱ばぬがぬまは坂の是だに方  
ぬまあるありひぐ河内やの敷方  
延巻史をうり外 延巻好 結うねてく  
サるくあう律がさるく ヒイキ ヲウ  
いやくあうあひ何はとさるく  
おぐわめそわくあちの敷方めくさふ  
律があつこのり 物 オット付らうだん  
まう切でちのりと飛出しまるく

婦女連 西のり長巻がまらるわりておこ  
せぐあつこの 既見 次(雨)の股敷

舟とつとれたかの虫 ヒイキ 又物(まら  
わめま) 又切巻 今ちつとあつこのまわ

しとあひひす さし いせのぐドツコイよ

る 既見 股の津の雨 さし まありの

ま国がのりす 切方 巻をまは巻

てあつこのり洋版か引張津

のりともあつて最ま い ちま後るわあ

て虫津 ま 好 ま ころり虫津の津津志

る津の門あつ道り つ じ河の洋版か

房 の さい 既見 西も者力あふびとあ

ら ま さい 既見 どの倍合 又切巻 既(航

養天の律あや く 日のおであつ ヒイキ

竹 た よう ま あら 切 天(河)津 ま

の 既見 若 ま 九 ま 骨 ま り ま の ま じ ま ぐ ま

ま ま 既見 倍合のま ま 東 ま ら ま



第天區小區瓦町三丁目

編輯者 中井恒治良

第天區小區安壽町四丁目

出版人 山本重助

瓦町中橋西入

發兌 叔浦利兵衛

八幡筋心齋橋東

賣捌所 玉置清七

諸方書林州紙屋、差出シ候  
間御寂奇ノ方ニテ五購求ノ程  
乞ッ

